

新居佑
表紙イラスト：舞猫ルル

退魔師な
幼馴染が
エロ
すぎる



二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『退魔師な幼馴染がエロすぎる』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



退魔師な
幼馴染が
エロ
すぎる

新居佑
表紙 / 舞猫ルル

登場人物紹介

Characters

み かいどう

美階堂 さやか

美しいボディスタイルになんでも完璧にこなすパーフェクトお嬢様。しかし、幼馴染の浩也に対してだけは口汚く罵ったりするなど、お嬢様らしからぬ態度を取る。実は退魔師として活動している。

さわはら ひろ や

沢原 浩也

幼い頃からさやかの理不尽な命令に何だかんだ従ってきた少年。豚や奴隷などと呼ばれようとも、決して折れない強い心の持ち主。

「はあはあ……ああつ」

深夜、私立金剛寺学園に通う沢原浩也は、ふいに耳慣れないどこか熱っぽい吐息を感じ、同時に発した強烈な感覚に、本能的な覚醒を促された。

「ん……なんだ。下半身が急に熱く……それになんか、いい匂いが……め、眼鏡眼鏡……」
 いまだ寝ぼけたままの両目に愛用の丸眼鏡がキリッと装着され、フレームをツイッと右中指で押し上げると、暗闇の中で目を凝らす。

弱い蛍光が照らす真夜中の闇に映りこむ、それが、甘ったるい声とともに、鮮明に飛び込んできた。

「ああ……ああ。んう……はあはあ」

「んな……つつ!!」

浩也は一瞬我が目を疑った。

淡い闇夜の中で、白と朱色の巫女衣装を身に纏い、艶やかな肌に大粒の汗を浮かべながら疑いようのない喘ぎ声を発している、少女が、彼の足元で横になり、寝間着越しにいきり立った男根をじつと、物欲しそうに見つめているのだ。

長いストレートの、いかにも和風美人といった黒髪を纏わせ、整った美貌が紅潮している。どういいうわけか着崩れている巫女服の間から、ボンツとたわわに膨らんだ巨乳とくつきりとした谷間がはつきりと覗いている。

浩也のベッドに寄りかかっている上半身と同様に、力なく座り込んでいる下半身へと目を移せば、いまだきの流行なのかどうかはわからないが、スカート状の赤いひらひらが膝上のかんりの短さまで切り上げられており、そこからムッチリとした極上の肉つきの太腿が覗けてしまう。

もう少し目が慣れてくればツウと流れる汗の行く先、少女の両脚の間にあるだろう下着と、その秘奥まで覗けてしまいかねない大胆かつ悩まし姿勢だ。

しかし、そういった性的なアピールよりもさらに衝撃的な事実には、浩也はいまだ深夜にも関わず、とっさにその名を口にしてしまった。

「み、みみみみみみ………つつつつ！ 美階堂さやか………つつ!!」

「黙れ、この牡豚つつ!!」

「な………ぐほうあああつつつつ!!」

ドガツツ!! という擬音でも響かせたい勢いで顔面にヒットした巫女服少女の下品な言葉と強烈な蹴りに、浩也は情けない悲鳴を上げてしまう。

「うぐつ、あああ………な、なんでいきなり………」

きれいに水平に繰り出された少女の足裏の感触と、ヒリヒリする痛みにうろたえながら、浩也は世の中の不条理と現実との接点に戸惑わざるをえない。

「私の名前を呼び捨てなんて………豚のくせに生意気よ………つつ」

「痛う〜。って、誰が豚だつ。いつも言ってるんだろ！俺の名前は沢原浩……げふう
つつつ！」

顔面の次は、鳩尾をピンポイントで狙ってきた少女の右ストレートに、浩也は低いうめ
き声を上げ、ピクピクと弱々しく身体を痙攣させる。

「黙れって言ってるでしょ。わかったかしら豚？」

いつの間にかベッドに上がりこみ、軽いマウンティングポジションから睨みつけてくる黒髪の
少女は、浩也の名前を勝手に豚化してしまう。

ミニスカ巫女姿の少女は勝ち誇ったかのように、ひどくうつとりとした表情で上から告
げた。

「まあ、いいわ。今回だけは許してあげる。名前が呼びたいなら呼びなさい。私の、口に
しただけで昇天できるほどの神々しい名前をね」

人の部屋に無断で侵入しておきながら、(女の子にも関わらず)蹴りや拳までかまして
くれたコスプレ少女に、本来なら速攻で110番をお願いしたいところだった。

しかし浩也は、虫けらを見下ろすように突きつけられた少女の言葉に半ば気圧されるよ
うに、恐る恐る口を開く。

「う……み、美階堂……さやか……さ、様……」

再び呼び捨てにしようとして、慌てて「様」と言い直した。そうしないと彼女によって、

漢らしく真つ白い灰にされてしまいそうだったからだ。

様付けされた名前を呼ばれて、目つきがさらにSっぽさを増したミニスカ巫女服の美階堂さやかを見上げながら、浩也は思った。

美階堂さやか……この国の雇用者数の八割に關係を及ぼしている美階堂コンツェルンの会長の孫娘である。

浩也とは、同じ金剛寺学園に通うクラスメイトであり、互いの親同士の關係で、ほとんど生まれたときから今までの腐れ縁、いわゆる幼馴染というやつだ。

美人で才女、おまけに実家がとてつもない大富豪の少女と幼馴染とくれば、誰もが羨む夢のようなリア充生活だが、浩也にとってさやかの存在は悪夢以外の何者でもない。

学園でのさやかはマドンナ的な扱いで、にこやかな笑顔と面倒見のいい性格から、クラスメイトはもとより教師たちからも一目置かれてる存在だ。

なのに――。

「ああ、イイわあ。様付けなんて、豚也。あんた自分の立場がわかってきたじゃない」
……ふう。

浩也はこめかみを押さえながら、深く絶望の溜息をついた。

（お前、クラスの中に、さやかさん、なんて言われて、愛想振りまいてるじゃねえか。なぜ俺だけ豚!? しかも、様付け!!）

9

一体いつからだっただろう。

眼前でサディスティックな恍惚に浸っているお嬢様は、幼馴染である浩也のことを、いや浩也のことだけ、いつからか豚だの、拳句に奴隷だなどと呼び始めていた。

(幼馴染が可愛いなんてのはタチの悪い都市伝説か！ バーカバーカ！)

本当に言葉に出せば、美階堂の権力、そして彼女の暴力を持って謀殺、撲殺されかねないため、浩也は(あくまで)心の中で力強く叫んだ。

彼女にとって自分など幼馴染の枠を超越した悪しき主従関係、女王様と奴隷の関係ではないのだろうか。

なぜそうなったのかはわからない。けれど現実問題として、浩也はさやかに屈服を強いられ、頭が上がらないどころかタメ口すらも憚られる関係に終始している。

「く、それでさやか様。いったいどうしたんですか、こんな真夜中に!! しかもなんですその服は……?」

浩也はせっかくの安眠を妨げてくれたこの幼馴染に対して湧き上がってくるどす黒い感情を、必死の精神的努力によって抑え込み、自分でも信じられないくらいやんわりとした物言いで事情を聞いたです。

(まさかこいつにコスプレの趣味があったとは……。)

アポなし深夜のお宅訪問にも驚いたが、彼女の着ている巫女装束もまた驚愕に値するも

のだった。

さやかのプロポーションは同世代の他の女子と比べても、圧倒的に美しかった、いやストリートにエロティックな身体つきをしていた。

彼女の性格を苦々しく思っている浩也ですら、素直に「すげえ」と唸ってしまうほどの完璧なボディスタイル。

誰かが撮ったさやかのお宝写真が、放課後の校舎裏で、高値で取引されているという噂もあながち嘘ではないだろうなど、幼馴染ながら思ってしまう。

グラビアモデル並に出るところは出ているし、締まるところはキキユツといい感じに締まっている。

また生まれからくるセレブ独特の浮世離れした高貴なオーラが、彼女の美しさを神々しいものにまで高めていた。

普段ですら、もうすぐ破れるんじゃないやねえの的なパツンパツンの、男子にとっては凶悪すぎるエロさの制服姿を見せ付けている彼女が、今に至ってはミニスカ巫女姿で、浩也の上にのしかかっているのだ。

理由いかんでは、本当に裁判沙汰にまで発展させなければならぬ。

「し……信じてもらえるかわからないから、ずっと黙ってきたんだけど……」

ふいに真剣なものへと変わったさやかの表情に、思わずゴクリ……と唾を飲み込む。

い、いったいなんだっていうんだ!!

期待と不安を募らせながら、待つ。そして。

「私、退魔師やってるの。この巫女服は靈力を高めるためのものなのよ」

なに言ってるんすか、あんた~~~~っつ!!

思わず軽快なツッコミをかましそうになって、危うく留まる。

ここで冗談でも「嘘だろ、お前!」と反応しようものなら、命がいくつあっても足りない。そういうものだ、彼女は。

(しかし、退魔師……だと!! とうとう電波でも受信するようになったのか、こいつは!!)

他人を豚だの奴隷だと平気で言うのは、美階堂という強烈すぎる家のプレッシャーのせいかとも思ったが、いい年して厨二病を発病するとは……幼馴染としては少しだけ悲しい気分になった。

けれど――。

「あ、あんまりジロジロ見ないでよね。この服、けっこう露出多くて……は、恥ずかしいんだからっ」

勝手に上からのしかかっという何を言う。

そう心の中で悪態をついてから、彼女の言葉を無視して、改めて巫女服姿のさやかを見

真つ赤な乳首からは白い牝乳が、さやかなの絶頂に合わせてまるで射精のようにドピュドピュと噴き出し続けている。

「イイイイツツ！ おっぱい出てるううっ!! 気持ちよすぎるっ。くああああんっつ!!」
二つの勃起した乳首からあふれ出す牝の白汁は、さやかなの身体に粘ついたローションでも塗りたくったみたいにヌルヌルに染め抜いていく。

「あああ、おっぱいなんて……み、見るんじゃないわよお。こんな恥ずかしいの……あひいつ、また出る……射精してるううっ!!」

高々と母乳を噴上げながら、さやかなの顔が羞恥に彩られる。いくら気位の高い令嬢とはいえ、幼馴染に母乳でヨガるところを見られるのは、たまらない恥ずかしさを伴ってしまう。

「別に恥ずかしくないってっ。母乳なんて、俺は気にしてない。いいじゃないか、さやか。思いつきり気持ちよくなっちまえよっ!」

てかてかど光る少女の身体を母乳ローションごと愛撫して、乳首を思い切り抓る。

「あつふううんっつ! くああ、イ……イイのねっ!? 浩也あ、わ、わかつたわよお……私、おっぱい出しまくって、気持ちよくなるわよおおっつ!!」

浩也の言葉によって、羞恥を快感に変えたさやかは、恥じることなく身体に湧き上がる快楽にのめり込んでいく。

弾力と感度を増した乳房を、浩也の左右合わせて十本の指先が深く揉むと、その快感はすぐさまさやかかの膣壁に伝染し、ウネウネと動く肉道が固い男根にさらなる快感を与えてくれる。

「ひぎいいんつつ！ ま、またおつききになったああつつ！ 浩也のチンポが私の膣内で太おおおつつ！！ も、もつと締め付けるんだからつ。もつと気持ちよくなりたいのよおおつ！ あひいいつつ」

さやかかの全身がブルブル震え、もう何度目かわからない絶頂に達してしまったようだ。すでにイク、という言葉の意味は教えたが、まだどこか恥じらいがあるのか、その言葉を口にはしてくれない。

（お、俺ももう限界だつ。で、でも最後に言ってもらいたい。こいつにあの言葉を。思いつきりエロくつ！）

牡としての欲望が、浩也の極々小さな、本人にとっては何となく重要なミッションを夢想する。

これまで虐げられてきたさやかに、イクなどという言葉を使わせることができれば、どれだけの快感が得られるかわからない。

「さ、さやかつつ！」

「へあああつ、な……なによおおつ。あああつ、またくるつ！！ 気持ちよすぎるのくるうう

っ!!」

「どうやら呼び捨てにしても、完全にOKな具合らしい。

「気持ちいいのがくるよなっ? それはなずばり、イク、って言うんだよ。わかるか、イク、だ」

イクという二文字に、人生の哲学がこもっているかの勢いで力説する浩也。実際彼にしてみればそんなものが詰まっている。

そう、エロくてたまらない幼馴染にイクと素直に言ってもらいたい。これはまぎれもない男のロマンだ。

「イク……それが気持ちいいってことなの? あひ、ひいっ……それ言ったらもつと気持ちよくなれるの?」

振り向いてこっちを見上げる彼女の表情は、ひどくコケティッシュで、これまでの豚発言などすべてを許したくなるような憂いとリビドーに満ちた、張り詰めたものだった。

そんな状態でイクなんていわれたらもう……っ。

「ああつ、断言する。幼馴染の俺が言うんだ間違いない。妖魔の呪いとかつてのも一気に吹っ飛んで、さやかはもつと気持ちいいところまで飛べるって!」

さやかは言われて、まだ暫し悩んでいる様子だった。意味はよくわからなくても、その響きに宿る妙にエロスなものを感じ取ったに違いない。

恥じらいながら、彼女は答える。

「……い、いいわ。も、もうすぐくるの……お、お願いよ浩也。い、一緒にイこう？ わ、私と一緒に……お願い……」

いつもの高飛車な言動は影を潜め、完全にしおらしくなってしまうている。

そんなさやかのお願いに、浩也は計らずも心奪われてしまう

「ああつつ、任せておけつつ!! うおおおとおおつつ!!」

その儂さに答えるように、浩也は思い切り腰を振りたて、胸を揉みしだいた。

グニグニと胸の形がマシユマロみたいに変わっていくが、気にはしない。これまでの経験から、さやかは実はきつく責められる方が感じる性質らしいことが、なんとなくわかってきたからだ。

その証拠に――。

「はつつ、ひいんんつつつ!! ああつつ、き、きも……気持ちイヒイイツツ!! む、胸があつ……オ、オマ……オマ○コもおおつつ!! ビリビリなってるうつ。あひつ、きやひいひいひいひい!!」

ロデオの馬のように跳ねて暴れる感じっぷりに、ベッドがぎしぎしと音を立てて、白と赤の巫女装束が揺れる。

これまでは絶対に口にしないとされていた卑語も思うがままに連発し、快感に身を委

ねきっている。

「も、もう出そうだ……！　そ、外に出した方がいい、よな!?　さやか!？」

男としてのケジメとして一応聞いておかなければならない。悲しむのはさやか本人だ。

「な、中でイイのつつ！　膣内じやなきやダメなのとおおつつ!!」

思わず耳を疑ってしまった。本当か、おい？

「膣内に出さないとおお……解呪できない、からああつつ！　イ、イイわよおつ、さやかの膣内に出してつつ！　思いつきりザーメンぶちまけてえええつつ!!」

そういうことか。いや、それでも浩也は素直にうれしかった。

さやかの顔はまた真つ赤に紅潮していた。膣内に出して!　なんて、プライドの高いさやかがそう簡単に懇願できるものではない。

その恥ずかしさを押し殺して、顔を赤らめ、うっすらと涙さえ流しながらの願いは、とんでもなく可愛かった。

こんなに愛らしい幼馴染に中出しできるなんて、男として本望だ。

「くああつつ、出るぜえつつ!!　さやかつつ、一緒にイこう!!」

「うんっ、うんつつ!!　私もイクううつつ!!　浩也とイクのおおおつつつつ!!」

ドビュオオオオツツ!!　ドビュアアアアツツ!!

熱く煮え滾った野性の濁流が解き放たれ、一斉に肉道を通って、少女の最奥部にまで流

れ込む。

「あつつひいいいいいいつつ!! あひゆいいいいつ! せ、せーえき……精液出てるっつ! んああつ! 膣内にいドクドクつてええ。ああ、気持ちイヒイッ。イクイクツツ!! わらひ、イククウウウウツツ!!」

ビクンツツ! ビクビクウツ! とさやかな身体が反り返り、瞳が白目を剥いて、淫らなアへ顔を晒す。

さらに追い討ちをかけるかのように、浩也が握っていた両乳首を思い切り振り上げる。

「イクツツ! んあうつ、おっぱいも出てるううつ!! ああ、あああつつ!! ドピユドピユウウウツ!! ひぎいいいんんつ」

まるで壊れた水道管のように、ビュービューと真つ白い母乳が飛沫をあげて辺りを染め抜く。

だらしなく開いた口から垂れる涎に、浩也が肉棒を引き抜くと、ドブオオツ! と白濁と愛蜜が溢れかえる。

「あつ、あああつつ!! イツグツツ。イグイグウツ!! わらひ、精液ひりだしてイつてるううつ!! 止まらない、ずつとイつてるううつ。こんなの……もう最高よおおおつつ!!」

全身を白濁にまみれさせながら、巫女装束姿の少女は、あふれた精液の中へと、絶頂痙攣に震え続ける女体を沈めていく。

少しおぼつかなかったさやかかの手探り方も、相変わらずものすごいスピードでエロティックに進化していく。

浩也の高速の突き込みに対応して、揉むタイミングや強さを緩急自在に変えてくる。時にはマシユマロのように柔らかく、そして時には温かく、勃起しきった牡棒に女の胸性器を思う存分堪能させてくれる。

「はあはあ、胸だけじゃなくて口でもしろなんて……ぶ、豚のくせに生意気なんだから……んくちゅっつ、んじゅるううっつ！ ずぶずぶ……はあ、どう？ 気持ち、イイかしら？ じゅるべっ、ふじゅるるっ！」

幼馴染の強烈なパイズリに興奮した浩也はそのままフェラまで要求した。胸を刺激され、さやかも浩也と同じように興奮していたのだろう。

昨晩つかんだ舌の感覚はそのままに、巨乳パイズリとバキュームフェラによる二重淫撃に、浩也の肉棒が悦びの悲鳴をあげる。

「き、気持ちイイッッ！ 気持ちよすぎる、さやかか胸と口っ！ このままじゃもうっ!!」

つい何時間前まで童貞だった少年にとって、幼馴染のエロすぎるプレイにそう長い間耐えられるものではない。

大きな二つの果実にはほとんど馬乗りの体勢のまま、力の限り腰を前後させて、ラストス

パートへ一気に駆け上る。

そして性への果てしない欲求は、下になっていくさやかにもいえることだった。

「んじゅぷあつ、あはあつ……い、いいわよっ！ いつでも……ちゆるうっ、きなさいっ！ 私の胸に、むふううっ……口の中にだつて……だ、出せばいいじゃないっ。 あんたの精液、んはああつっ！ ちゅぐぶちゅううっ!!」

ムニムニィッ。タップンタップンッ！

みるみる淫らな色に染まっていくさやかの美貌を見つめながら、浩也の情欲が加速する。眉根をきつく寄せ、艶つぼく口をすぼめてチンポを吸い上げながら発情している幼馴染に牡本能が沸点に達する。

「くっ、出るぞさやかっつ！ うあああああつっ!!」

ドブシャアアアアツツッ！ ドピュオオオオツツ!!

亀頭がさやかかの口の一番禺、喉の入り口に到達し、淫茎を抜く両胸が思い切り力を込めて採み込まれる。

高まりあつた男と女の性感帯が燃えるような快楽の電撃を放ち、浩也とさやかを昇天させる。

「ひぎいうっつ！ んぐんあああああつ！ 出てるううっ、浩也のザーメン……濃厚なのが、ふじゆるうっ……口の中……精液で溺れちゃうううっ!!」

氾濫した河川のように噴出した白濁は、さやかのお口内だけでは収まりきららず、逆流して少女の鼻からもあふれ出す。それでも足らない淫液は、さよかの胸部を真っ白に染め抜いていく。

「ほおおおおうっ、ふああっ……イグッ、ザーメンまみれで溺れてイクウウッ!! んぐぐっつ、ふううっ……んぐんぐっつ!!」

相当気持ちよかったのか、さやかは目を半分ぐりんと反転させたアへ顔のまま、口に残ったたっぷりのザーメンをおいしそうに飲み干していく。

その間、むっちりとした脂のついた淫らな身体がビクンビクンッと痙攣し続け、浩也の牡を満足させ、さらに沸騰させる。

「まだ一回だけ、さやか。くうっ、俺は、もっとお前で……したいっつ!!」

「ちょ……浩也、そこは違……んひいいいいっつ! ふ、深いいいいいっつ!!」

ズブズブツツ! と意外と簡単にチンポを飲み込んだのは、さやかのお尻……菊門だ。

牡欲に火の点いた浩也の衝動は、相手の事情を無視して、ただひたすらに快楽を貪っていく。

「おおうっ、ひいいんっつ……ず、ずっこんずっこん、つてええ……え、挟られてるのに、感じ……あおううっつ!!」

ほどなくして、まるで牝豚そのものようにさやかが野太い歓喜の声をあげる。

犬のようなバックの体勢で不浄の穴を弄られるなど、世界に冠たる美階堂家の娘としては考えたこともない行為だろう。

だが高すぎる。プライドは、時に屈折的な快感を少女にもたらず。

これまで豚扱いしてきた浩也との責め受けの立場の逆転と、後背位でのアナル突きといった被虐的なプレイが、さやかに、そして浩也にもこれまでとはまったく別次元の快楽を植えつける。

「イイ、イッてるつつ！ イッてるわよっ!! おおおつつ、お願い……もつとゆつくり、きやほおおおおうつつ!!」

亀頭でグリグリと直腸をかき回したかと思うと、即座にいきり立った剛直で奥底まで貫く。

（膣内とはまた違う……くっ、すげえ締め付けつつ。こいつ、ココ相当弱いんじゃ……うおおおっ！）

昨晩挿入した前の穴と比べても、まるで遜色ない後ろのキツキツした収縮に、浩也はさらに突き上げる速度を上げていく。

二人きりの静かな保健室にパンッパンッ！ という肌と肌とがぶつかりあう音と、グチユグチユという淫らな牝牝の水音が鳴り響く。

「イクイク……だめえ。こ、腰が蕩げちゃう……お尻、気持ちイイッツ!!」

圧倒的な快感にイキ癖がついてしまったかのように、さやかの腸肉が浩也の勃起をグイと食い締めてくる。

構わず浩也は本能の赴くままに、ズンズンと肉棒を突き進め、互いの果てしない快樂への欲求を煽り立てる。

「で、出るつつつ!!」

「な……急に——つつつ!」

ドビユウウツツツ! ベチャアアツツツ!!

パクツと割れた亀頭から放たれた白い奔流が、さやかの腸内を埋め尽くす。熱い牡の飛沫がお尻の奥、お腹の底まで満たしきり、燃えんばかりの熱量が快感となって少女を狂わす。

「へはあああああつつつ! 出て、るうつ。お尻つ、ああつ……イクツツ! もつとイグウウウウウツツ!!」

喉を思い切り反らし、情けなく舌を垂らしたまま、はあはあと深い息をつくさやか。ブチュリと肉棒を引き抜くと、「はおんっ!」というやけに色っぽい声を響かせた。

腸道からはドロリとした白濁があふれ出しており、さつきまで極太の男根を食い締めていた菊門は可愛らしくヒクヒクと、絶頂の余韻に浸りきっている。

「はあ……あは、ふうふう……」

昨晩よりも大きく息を吐きながら、さやかはベッドの上で日頃の高飛車さが嘘のように、

おとなしく横になっている。

彼女が息を吸って吐くたびに、大きく張り詰めた乳房がリズムカルに揺れ動き、制服にまでベツトリとついた白い粘液まみれの女体は、ひどく美しく、そして一際可愛らしく映る。

「わ、悪かったな。さっきはその……いろんなところに挿れてさ。ほんとごめんっ」
二回吐き出して、発情の呪いも少しは薄れてきたのだろう。

幾分か理性を取り戻した浩也は、白濁まみれのさやかに向けて、頭を下げた。

「はあはあ、も……もういいわよ別に。私がかしてあげると言っただから、あなたが悪く感じる必要、あるわけないじゃない。まったく豚なんだから……」

まだ落ち着かない息を切らしながら、さやかはそう言っつて、ぷいっと横を向いてしまう。そして暫くして、頬をほんのり染めたまま、こちら見て口を開いた。

「そ、それにまだ二回しか出してないでしょ？ あと一回、早く出さないよ」

「さ、さやか……」

強気な姿勢は崩さないまま、少し恥じらう幼馴染に、計らずも浩也の心臓がドキリと高鳴ってしまう。

（そんなしつとりとした表情とか……か、可愛すぎだろおおつ）

これまでの本能に突き動かされるままだったものとは違う、もつと愛おしい感じのするなにか。そんな気持ちに浩也の中に生まれ、反芻される。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>